

適切な育苗管理で、早期活着と初期生育を確保しましょう！

1 育苗計画 ～品種に応じて適期となる田植え計画を立てましょう～

- 高温登熟を回避するため、コシヒカリの移植は5月10日以降に行うよう、育苗計画を立てましょう。つきあかり等の早生品種は早期に茎数を確保するためコシヒカリより早く作業を開始し、可能な範囲で早植えとなるよう計画しましょう。
- 育苗期間のめやすは、コシヒカリの稚苗では表1のとおりです。
- は種が早すぎると老化苗となり、本田での初期生育不良、生育の後ずれ、茎数不足につながります。稚苗は2.0葉、中苗は3.5葉を適期に田植えできるように、育苗計画を立ててください。
- 密苗は軟弱徒長しやすく、さらに老化苗になると、標準は種した苗より活着や初期生育が不良となるため、適期の移植を実施しましょう。

表1 コシヒカリ稚苗の育苗スケジュールの例（5月10日移植の場合）

育苗様式	浸種	催芽	は種	出芽期	緑化期	硬化期	移植
加温出芽ハウス	4/10～	4/20～	4/22	4/22～	4/24～	4/27～	5/10
加温出芽露地プール	4/8～	4/18～	4/20	4/20～	4/22～	4/25～	
無加温出芽ハウス	4/8～	4/18～	4/20	4/20～	4/24～	4/27～	

2 種子予措・は種作業 ～休眠の深い品種は浸種の積算温度を120℃に設定しましょう～

(1) 種子消毒

- 近年、温湯消毒の普及に伴い、褐条病(葉鞘がすじ状に変色し枯れる)、ばか苗病(苗が異常に徒長)などの発生が見られます。温湯消毒の単独処理では、防除効果が十分に得られない場合があるため、微生物農薬(タフブロック)との体系防除を実施しましょう。(表2)
- 細菌性病害(褐条病やもみ枯細菌病、苗立枯細菌病等)に対しては、種子消毒だけでは十分な効果が得られないことが多いため、カスミン粒剤・液剤との体系防除を実施しましょう(表2)。

表2 種子消毒と体系防除を行う農薬の活用について

農薬名	使用時期・方法	希釈倍数・使用量	使用回数
タフブロック	催芽時24時間種子浸漬	200倍	—
カスミン粒剤	は種後覆土前散布	1箱当たり15～20g	1回
カスミン液剤	は種後に希釈液を散布	4～8倍で50ml/箱	1回

※令和3年3月1日現在の農薬登録情報に基づいて作成しています。農薬の使用に際しては、必ず最新の登録情報を確認して使用しましょう。

(2) 浸種

- 必ず清水で浸種し、水量は種籾1kgに対して約3.5リットルとします。浸種開始3日後以降はこまめに水を交換し、酸素不足を防止しましょう。
- 通常は、水温10～15℃で積算水温100℃をめやすとします。休眠が深いと推定されるコシヒカリや、休眠が深いことがあるつきあかりについては、水温12℃で積算水温120℃をめやすとし、発芽揃いを良くしましょう。
- 特に、浸種初日の水温が10℃より低い場合は発芽不良を起こす場合があるので注意しましょう。



○鳩胸状態 ×伸ばしすぎの状態

図1：理想的な鳩胸状態の籾

(3) 催芽

- 温度は30℃、1～2日をめやすとし、鳩胸状態の籾(図1)が80%程度となったら催芽を終了します。

表3 1箱当たりのは種量めやす

主な品種	区分	乾籾	催芽籾
コシヒカリ	稚苗	130～140g	160～175g
	中苗	80～100g	100～125g
つきあかり	稚苗	145～155g	175～190g
	中苗	90～110g	110～135g

(4) は種

- 厚まきは軟弱徒長苗や育苗障害の発生に、また極端な薄まきはマット形成不良の原因となります。適切なは種量では種しましょう(表3)。

露地プール場所の準備

- 温度変化の少ない場所を選定し、強風が当たりやすい場合は防風ネット等の風対策を行いましょう。
- かん水時の水位差が少なくなるよう、置き床を可能な限り均平にしましょう。敷材はやや厚手のビニールを用い、水漏れに注意しましょう。

3 育苗管理 ～育苗様式に応じた管理を徹底しましょう～

育苗様式	ハウス育苗	露地プール育苗
出芽期	<ul style="list-style-type: none"> ○ 稚苗は、加温出芽の場合は30℃で2～3日程度加温し、出芽長を0.5～1.0cmにしましょう。 ○ 中苗は、加温出芽の場合は30℃で1～2日程度加温し、出芽長を0.5cm未満にしましょう。 ○ ハウスでの無加温出芽は5～7日程度日数を要します。低温時は保温するなど注意しましょう。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 露地育苗での無加温出芽は、出芽が不安定となりやすいため、気温が安定する4月20日以降から行いましょう。
緑化期	<ul style="list-style-type: none"> ○ 出芽期直後の苗は、急激な気温の変化や強い光に弱いため、緑化完了までは被覆資材で遮光しましょう。 ○ 床土が乾燥している場合は、床土の温度低下を避けるため、午前中の早い時間に灌水しましょう。 ○ 第1葉の葉鞘の長さが稚苗で3.5～4.0cm、中苗で2.5～3.0cmになったら被覆資材をはがし、緑化を終了します。 ○ ハウス内が25℃以上の場合や好天で気温が上がりそうな時は、換気を行いヤケ苗の発生を防止しましょう。 ○ 温度は昼間20～25℃、夜間15～18℃が管理のめやすです。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ シルバーポリトウ#80やミラシート、ラプシート、ワリフなどを組み合わせて二重に被覆し保温に努めましょう。 ○ 高温が予想される日中は、遮光しながら必要に応じて資材を撤除しましょう。
硬化期	<ul style="list-style-type: none"> ○ 除覆後は日中にハウスを開放し、苗を徐々に外気にならしめていきます。 ○ 温度は昼間15～20℃、夜間10℃以上が管理のめやすです。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 葉齢が1～1.2葉になった頃から、かん水を始め少しずつ水位を上げていきましょう。 ○ 移植2～3日前には落水します。 ○ 移植後の活着を早めるため、移植の4～5日前(稚苗で1.8葉頃)に窒素で1g/箱(老化苗の場合2g/箱)を追肥しましょう。

4 耕うん作業・代かき作業 ～根域拡大のために耕深15cmを確保しましょう～

- 畦塗りは丁寧にやり、畦畔の亀裂やねずみ穴等からの漏水防止に努めましょう。
- 過湿状態での耕うんは耕深が浅くなったり、初期から還元状態となり、稲の生育に悪影響を及ぼします。できるだけ乾いた状態で耕起しましょう。
- 根域を拡大し、高温や水不足の影響を軽減するために、耕深15cmを確保しましょう。
- 保水性の確保及び除草剤の効果を安定させるために、代かきは丁寧にやりましょう。